

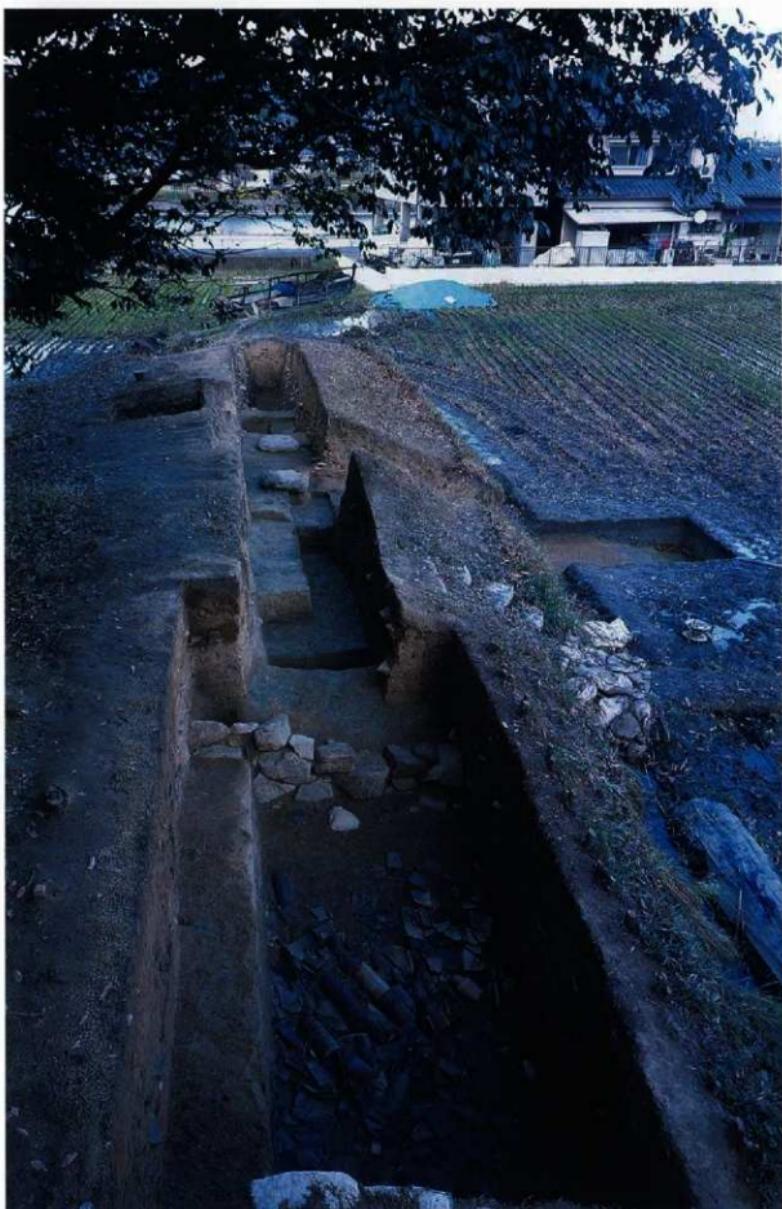
西安寺跡第8次
発掘調査報告書

2020. 3

王寺町

西安寺跡第8次

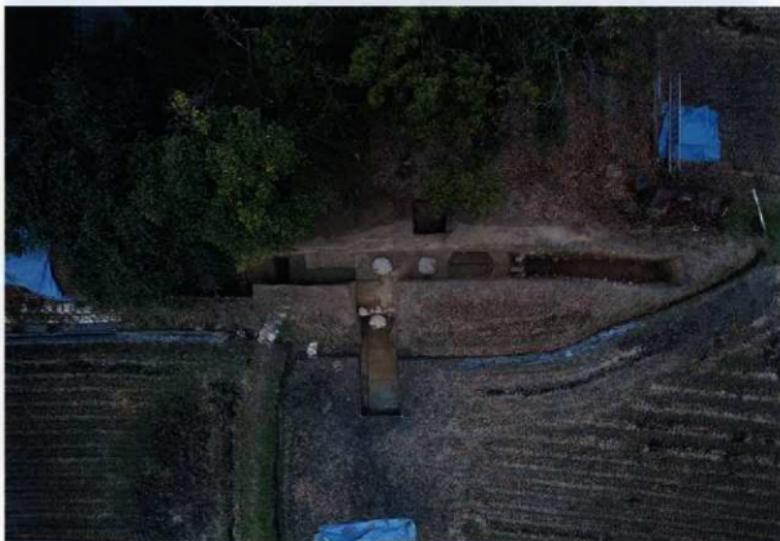
発掘調査報告書



遺構検出状況（南から）



調査地遠景（南東から）



遺構検出状況（上方から）

序

西安寺跡は飛鳥時代に創建された寺院遺跡です。これまでの発掘調査で塔跡が確認され、西安寺の遺構が非常に良い状態で残されていることがわかってまいりました。2019年2月22日には、奈良県の史跡に指定されています。

また、2019年7月には、「王寺町文化財保存活用地域計画」が文化庁長官の認定を受けました。これは、地域における文化財の保存と活用を総合的に、かつ計画的に行うことができるよう創設された制度で、王寺町のあらゆる文化財の保存と活用に向けて、現状、課題と方針、それに今後取り組むべき事業などをまとめています。この中で、西安寺跡も王寺町の貴重な文化財として保存・活用していくことになっております。

本書は、2018年度に文化庁の国庫補助事業として実施した西安寺跡第8次発掘調査の成果を報告しています。金堂跡と推定される建物跡を調査し、西安寺跡についてより深く理解できるように努めました。

最後になりましたが、調査の実施にご協力くださいました土地所有者様はじめ、文化庁、奈良県など、関係各所の皆様に御礼申上げます。

2020年3月

王寺町長

平井 康之

例　　言

1. 本書は、奈良県北葛城郡王寺町舟戸2丁目地内で実施した西安寺跡第8次発掘調査について報告したものである。西安寺跡は『奈良県遺跡地図』(奈良県教育委員会、2010年改訂版)10B-0001として登載されている。
2. 調査は王寺町教育委員会が実施した。調査体制は以下のとおりである。なお、2019年度より文化財に関わる業務は、町長部局である地域整備部地域交流課文化資源活用係に移行している。

調査主体	王寺町教育委員会 (~2019.3)	王寺町 (2019.4~)
教育長	中野衛	町長 平井康之
教育次長	中井一喜	副町長 平岡秀隆
生涯学習課長	藤本忠司	地域整備部長 植野善信 (~2019.10)
社会教育係長	青山幾一	地域交流課長 前田日出高 (2019.10~同参事)
	岡島永昌 (文化資源活用係長)	
	寺農織苑 (2019.10~文化資源活用係主事補)	
調査担当者	櫻井恵 (2019.4~文化資源活用係臨時職員)	
	福井彩乃 (2019.4~文化資源活用係臨時職員)	
遺物整理	青木佐和 (2019.4~文化資源活用係臨時職員)	
発掘作業	安西工業株式会社	
空撮・写真測量	株式会社アクセス	
調査協力・助言	宗教法人舟戸神社、文化庁、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、奈良県教育委員会事務局(奈良県地域振興部文化財保存課)、奈良県立橿原考古学研究所、荒木浩司、池田博、石橋忠治、泉森皎、伊藤純、江浦洋、大橋泰夫、岡田雅彦、奥田尚、甲斐弓子、北川咲子、近藤康司、齋藤希、狭川真一、清水昭博、鈴木嘉吉、鈴木裕明、関川尚功、高橋香、嶽光紀、田邊征夫、寺沢知子、箱崎和久、橋本裕行、東影悠、林正憲、菱田哲郎、平田政彦、平林章仁、廣岡孝信、松田真一、丸山香代、光石鳴巳、三好清超、山下隆次、山田隆文、吉村公男 (五十音順、敬称略)	
	西安寺跡史跡整備活用委員会 (2017.2.17 設置)	
	脇谷文則、大脇潔、山岸常人、東野治之、仲隆裕、坂靖、中川忠儀 (敬称略)	

3. 本書で使用している座標数値は世界測地系、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)に基づくものである。
4. 土層の色、遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖23版』に掲載された。
5. 図2は国土地理院発行の1/50000地形図大阪東南部(昭和59年7月30日発行)、および『奈良県遺跡地図』(2010年改訂版)、図3・図13は王寺町下水道台帳の地形図(1/500)をもとに作成した。
6. 石材同定には、奥田尚先生、瓦の同定調査には西安寺跡史跡整備活用委員会の大脇潔先生、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の林正憲氏にご協力、ご教示頂いた。
7. 出土遺物をはじめ調査にかかる記録はすべて王寺町において保管している。
8. 本書の執筆編集は櫻井恵が行った。

本文目次

第1章 はじめに	1
第2章 調査の内容	4
第3章 まとめ	15

挿図表目次

図1 王寺町の位置	図7 基壇外装立面図、土層断面図 (1/50)
第1章 はじめに	図8 4トレンチ 検出遺構平面図、 土層断面図 (1/50)
図2 周辺の遺跡 (1/50000)	図9 1トレンチ 基壇南面遺物出土状況 (1/40)
図3 調査位置図 (1/1500)	図10 出土遺物実測図1 (1/4・1/6)
第2章 調査の内容	図11 出土遺物実測図2 (1/4)
図4 1トレンチ 西壁土層断面図 (1/100)	図12 出土遺物実測図3 (1/6)
図5 検出遺構平面図 (1/100)	第3章 まとめ
図6 3トレンチ 検出遺構平面図、 土層断面図 (1/50・1/20)	表1 古代の金堂（遺構）の比較
	図13 金堂規模の復元 (1/250)

写真目次

巻頭写真図版1	写真図版3
遺構検出状況（南から）	1トレンチ 基壇外装南面検出状況（西から）
巻頭写真図版2	2トレンチ 基壇外装東面検出状況（東から）
調査地遠景（南東から）	3トレンチ 基壇検出状況（西から）
遺構検出状況（上方から）	写真図版4
写真図版1	1トレンチ 基壇外装北面断ち割り（北から）
調査前（南東から）	2トレンチ 基壇外装東面断ち割り（東から）
調査前（北から）	1トレンチ 基壇外装南面断ち割り（南西から）
3トレンチ 調査前（西から）	写真図版5
写真図版2	1トレンチ 碓石1（西から）
1トレンチ 遺構検出状況（北から）	1トレンチ 碓石2（西から）
1トレンチ 基壇外装北面検出状況（南東から）	1トレンチ 碓石抜取穴2（南から）
	4トレンチ 碓石抜取穴5（北から）

写真図版 6

1 トレンチ 西壁 磁石抜取穴 4 (東から)

2 トレンチ 遺構検出状況 (南西から)

2 トレンチ 南壁 (北から)

写真図版 7

1 トレンチ 基壇南面 東壁 (南西から)

1 トレンチ 基壇南面

均整唐草文軒平瓦出土状況 (北西から)

1 トレンチ 基壇南面

遺物出土状況 (北西から)

写真図版 8

出土遺物 1

写真図版 9

出土遺物 2

写真図版

出土遺物 3



図 1 王寺町の位置

第1章 はじめに

1 位置と環境

地理的環境 西安寺跡が所在する王寺町は、奈良県の北西部に位置しており、町の北端には、奈良盆地の河川の水を集めると大和川が蛇行しながら西流している。この大和川が亀の瀬とよばれる峡谷をぬけ、大阪平野へと流れ出していく先には大阪府柏原市があり、亀の瀬が奈良県と大阪府の府県境となっている。王寺町の北には、大和川をはさんで三郷町、斑鳩町があり、東に河合町、東南に上牧町、南に香芝市が接している。

西安寺跡は、河合町から延びる馬見丘陵の北端にある舟戸山（標高約80m）の西麓、舟戸山から延びる谷筋が広がる傾斜地に立地しており、その中心伽藍は舟戸神社境内にある。舟戸神社は周囲の土地から1～2m程小高く、最高所で約45.5mの標高があり、人為的に造成された土地との印象を受ける。

現在、舟戸神社の東側は、傾斜地を利用した田畠が広がり隣接地には水田が営まれる。西側には畑地、住宅地が広がるが、昭和40年代に住宅開発されるまでは水田であった。南側は小学校となっている。小学校は標高67.5mの丘陵を造成し設置されたもので、本来、西安寺跡の南側には、この丘陵の山裾が迫っていた。北側には約250mの位置に大和川が流れおり、往時は大和川から西安寺の堂塔が立ち並ぶ姿を見ることができただろう。

歴史的環境 西安寺跡の北方を流れる大和川は、古来より奈良盆地と河内平野を結ぶ重要な経路であった。弥生時代後期には、大和川を見下ろす舟戸山山頂に高地性集落の舟戸・西岡遺跡が営まれる。飛鳥時代の推古天皇16年(608)、隋の使者である斐世清が飛鳥に赴く際にも大和川を利用したと考えられている。奈良時代には、大和川に沿う龍田道は、平城京から難波に至る道として行幸路に使われた。近世には、剣先船、魚梁船とよばれる川船の就航が知られる。近代になると大和川の沿岸に鉄道、道路が敷設され、現在に至っている。

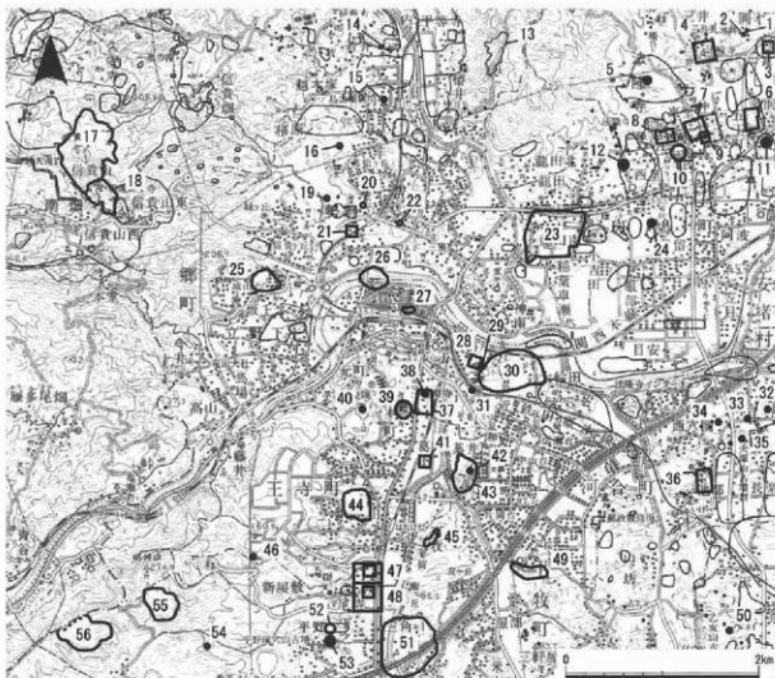
また、西安寺跡の西方には、近世に「当麻街道」とよばれる法隆寺から連磨寺を通り当麻寺へと至る道が通っている。この道は、推古30年(622)に斑鳩で亡くなった聖徳太子の御遺体を大阪府太子町にある俄長墓まで運んだ「聖徳太子葬送の道」として聖徳太子信仰の一つとなっている。

推古天皇9年(601)、聖徳太子によって斑鳩の宮の造営が行われており、それを契機として、大和川と斑鳩から延びる街道沿いには多くの寺院が建立されている。聖徳太子が斑鳩を居住地に選んだ背景には、大和川沿岸が朝鮮半島からたらされる先進文化の受け入れ口として、重要であったと考えられる。法隆寺若草伽藍は7世紀初頭、中宮寺跡・片岡王寺跡は7世紀前半、法起寺・法輪寺・法隆寺西院伽藍・長林寺跡は7世紀半ばから後半の創建とされている。

2 調査の契機と経過

既往の研究 西安寺跡については、昭和初期に保井芳太郎氏、石田茂作氏によって周知される。保井氏は、『大和上代寺院志』の中で文献にみられる西安寺（一名久度寺）は、「西安寺」の字名が残る舟戸神社に主要建造物があると考へ、採集された飛鳥時代から鎌倉時代の軒丸瓦、軒平瓦等を報告している。石田氏は、『飛鳥時代寺院址の研究』の中で、舟戸神社拝殿の北東に塔、拝殿の南側に金堂があると推定し、周辺の地形と神社の西方約30mの田地に「門脇」「馬場脇」との俗称が残ることから、西安寺は西面する法隆寺式伽藍配置の寺院としている。

西安寺の創建を示す史料は残されていない。その寺名が初めて文献に現れるのは、『続日本後紀』の天長10年(833)条であり、そこには西安寺が「大和国廣瀬（瀬）郡にあり、俗号久度」と記されている。時代が下つ



- 1 瓦塚 1号墳 2 三井瓦窯跡 3 法起寺境内 4 法輪寺旧境内遺跡 5 仏塚古墳 6 中宮寺跡 7 斑鳩宮跡 8 法隆寺西院
 9 法隆寺東院 10 若草伽藍跡 11 駒塚古墳 12 藤ノ木古墳 13 椿井城跡 14 西宮古墳 15 烏土塚古墳 16 今池瓦窯
 17 信貴山城跡 18 信貴山朝護孫子寺 19 辻ノ垣内瓦窯跡 20 上ノ御所瓦窯 21 平隆寺跡 22 勢野茶臼山古墳
 23 龍田城跡 24 斑鳩大塚古墳 25 立野城 26 久度遺跡 27 久度南遺跡 28 西安寺跡 29 西安寺瓦窯
 30 舟戸・西岡遺跡 31 岩才池北古墳 32 城山古墳 33 丸山古墳 34 高山塚 1号墳 35 川合大塚山古墳 36 長林寺跡
 37 達磨寺旧境内 38 達磨寺古墳群 39 片岡王寺跡 40 馬ヶ背城跡 41 寺院推定地 42 萩井瀬ノ北遺跡 43 香櫛・薬井遺跡
 44 岩田城跡 45 片岡城跡 46 岩田古墳 47 尼寺庵寺 48 尼寺南庵寺 49 下牧瓦窯跡 50 池上古墳 51 木辻城跡
 52 平野窯跡群 53 平野古墳群 54 今泉古墳 55 逆山城跡 56 七郷山城跡

図2 周辺の遺跡 (1/50000)

た仁安3年(1168)、弘安4年(1281)にも関係史料がみられ、貞和3年(1347)の史料では、西安寺が興福寺一乘院の莊園であったことが伺える。

創建時の史料がない中、西安寺の創建者については、平林翠仁氏による見解が示される(『新訂王寺町史』本文編)。仁安3年(1168)の「大和国大原吉宗田地売券」には、「広瀬郡久戸十条寺岡一里半五坪西安寺」にある田地は大原吉宗の先祖が相伝してきた地と記されており、現在の舟戸神社が領座するところにあたる。王寺町久度には、西安寺の別名と同一の久度神社(延喜式内社)があり、祭神の一つである久度神は、かまどの後方の煙だし部分を神格化したカマド神で渡来系氏族が奉斎するもので、久度一帯には渡来系氏族が居住していたと考えられることから、創建者は渡来系氏族である大原史氏としている。

既往の発掘調査 平成26年(2014)度、王寺町教育委員会は舟戸神社境内で第3次調査を行い、塔跡を確認した。翌年の第4次調査では、塔跡の北側で築版で構築された基壇と礎石を検出し、金堂跡と推定している。

これらの調査から、舟戸神社とその周辺では、西安寺の遺構が良好な状態で残ることが明らかとなった。そこで、王寺町では、平成 28 年（2016）度に西安寺跡史跡整備活用委員会を組織し、年次的に発掘調査を進め、西安寺跡を貴重な文化財として保存・活用することとした。その初年度の平成 29 年（2017）度の第 7 次調査では、塔跡の調査を行っている。第 3 次調査の成果とあわせて、心礎の抜取穴と四天柱の礎石を含む礎石抜取穴 5 基、側柱の礎石 3 個、乱石積基壇外装を検出した。塔基壇は一辺 13.35 m、建物の初層は一辺 6.75 m と復元でき、創建瓦の年代と心礎が地上式であることから 7 世紀末から 8 世紀初頭を創建時期としている。

調査の目的 第 8 次調査は、平成 27 年（2015）度に行った第 4 次調査で検出した基壇建物についての追加調査である。第 4 次調査では、版築で構築された基壇、礎石 2 個、礎石抜取穴 1 基、基壇外装と推定できる石列を検出している。今回の調査は、この基壇建物の規模と平面形を確認し、建物の用途を決定させ、伽藍配置の手がかりを得ることを目的としている。

調査の経過 今回の調査では、まず 2 つの調査区を設定した。1 トレンチは、基壇の南北両端を確認するために、第 4 次調査のトレンチを南北両方向へ延長する形で設定した東西幅 1.5 m、南北長 19.5 m の調査区である。境内の北東角の北方に延びる張り出し部分は建物の推定地から外れるが、「カワラヅカ（瓦を廃棄した場所）」と伝わるため、調査範囲に含めた。2 トレンチは、第 4 次調査で検出した基壇外装と思われる石列を含む南北幅 2 m、東西長 5.5 m の境内から東側の水田に延びる調査区である。

第 4 次調査の再発掘から着手した。1 トレンチでは、礎石 2 個を再検出し、新たに礎石抜取穴 3 基、南北両面の基壇外装を検出した。1 トレンチの南端では、基壇外装の検出にあわせて、トレンチ幅を 2.5 m に広げ、南へ 3.5 m 延長させている。2 トレンチでは、基壇東面の基壇外装と溝を検出した。

北、南、東の三面で基壇外装が確認できたため、塔の中軸を基準にして基壇の西端の位置を推定し、南北幅 2 m、東西長 3 m の 3 トレンチを設定した。基壇の西端は削平されており、西面の基壇外装は残っていなかつたが、基壇版築を確認した。

基壇外装、礎石等を検出した段階で、西安寺跡史跡整備活用委員会の先生方と検出遺構の検討を行った。検出遺構から、南向きの四面庇建物で金堂という点で意見の一致は得られたものの、礎石 2 個の柱間と基壇の出の寸法から建物の規模を復元することは困難であった。そこで、底部分の柱間を知るために身舎の北東隅柱が推定できる位置に 1.5 m 四方の 4 トレンチを設定した。しかし、礎石は抜き取られており、抜取穴を確認するに終わった。

調査は、平成 28 年 11 月 1 日から 12 月 28 日まで、実働 39 日。調査面積は、約 58 m²である。掘削はすべて人力で行い、遺構を検出した。同 12 月 14 日に空撮・写真測量を行い、同 12 月 22 日には、調査成果を公開するために現地説明会を開催した。調査現場公開後は遺構面を砂で覆い、埋め戻し作業を行い、調査を終了した。



図 3 調査位置図 (1/1500)

第2章 調査の内容

1 層 序

基壇建物の規模を確認するために、神社の境内と隣接する水田まで広い範囲にトレントを設定したため、場所によって堆積の様相が異なるが、以下の通りに大別した。

I層 表上。 現代の堆積土で境内では高葉土、水田では耕土である。

II層 境内の東斜面、北斜面に堆積する崩落土。近代。

III層 境内の東半に堆積する盛上。最も厚いところで 95.7cm を測る。近世から近代に造成されている。染付、唐津焼が含まれる。

IV層 調査地全体に広がる整地土（第7次V層）。基壇上には約 10cm、基壇外周には 50~80cm の堆積があり、13世紀~16世紀頃の土釜、瓦質土器の擂鉢、巴文軒丸瓦、平安後期の均整唐草文軒平瓦が含まれる。中世以降の堆積。

V層 調査地北半と 2 トレントに堆積する整地土。基壇上では 6.5cm、基壇北面の外周では、60~70cm の厚さがある。人為的に埋められており、瓦が帯状に堆積する様子が複数回認められる。層内は細分できるが、各層の出土遺物が接合することから、一連の堆積とした。2 トレントでは、基壇外装付近で厚さ 85cm、外装の外側 1.77m で厚さ 8.4cm と基壇側から傾斜がついた堆積となっており、基壇側から整地が行われている。素弁・单弁蓬華文軒丸瓦、重弧文軒平瓦、奈良時代の均整唐草文軒平瓦、須恵器、11~12世紀の土師器、黒色土器、綠釉陶器、瓦器、瓦質土器が出土した。上層のIV層と同じく中世の堆積だが、この層の上面で遺構が確認できたため画した。

VI層 基壇南面の外周に堆積する水成砂層。厚さ 20~30cm で基壇外装の下半を埋める。第7次調査のVII層につながる層で、塔の東面から塔と金堂の間でその堆積を確認している。

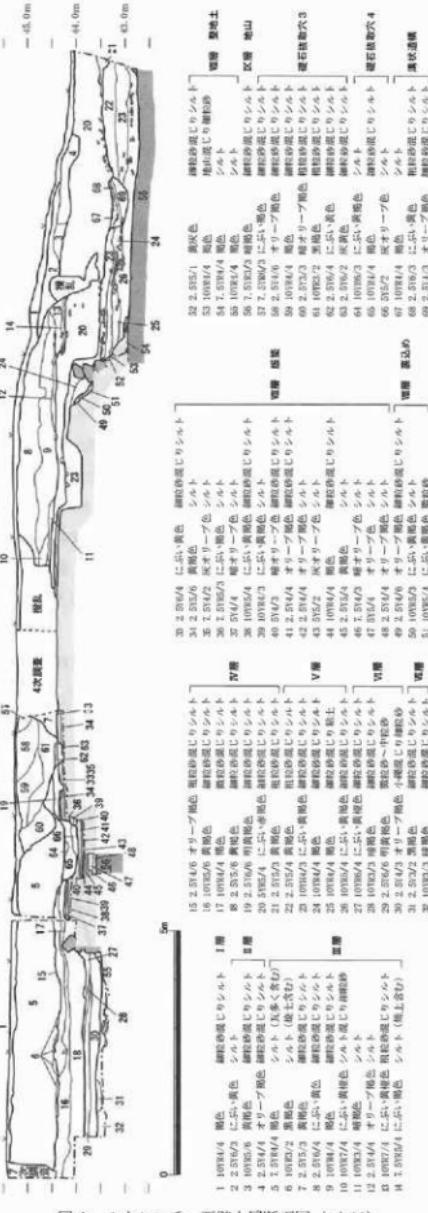
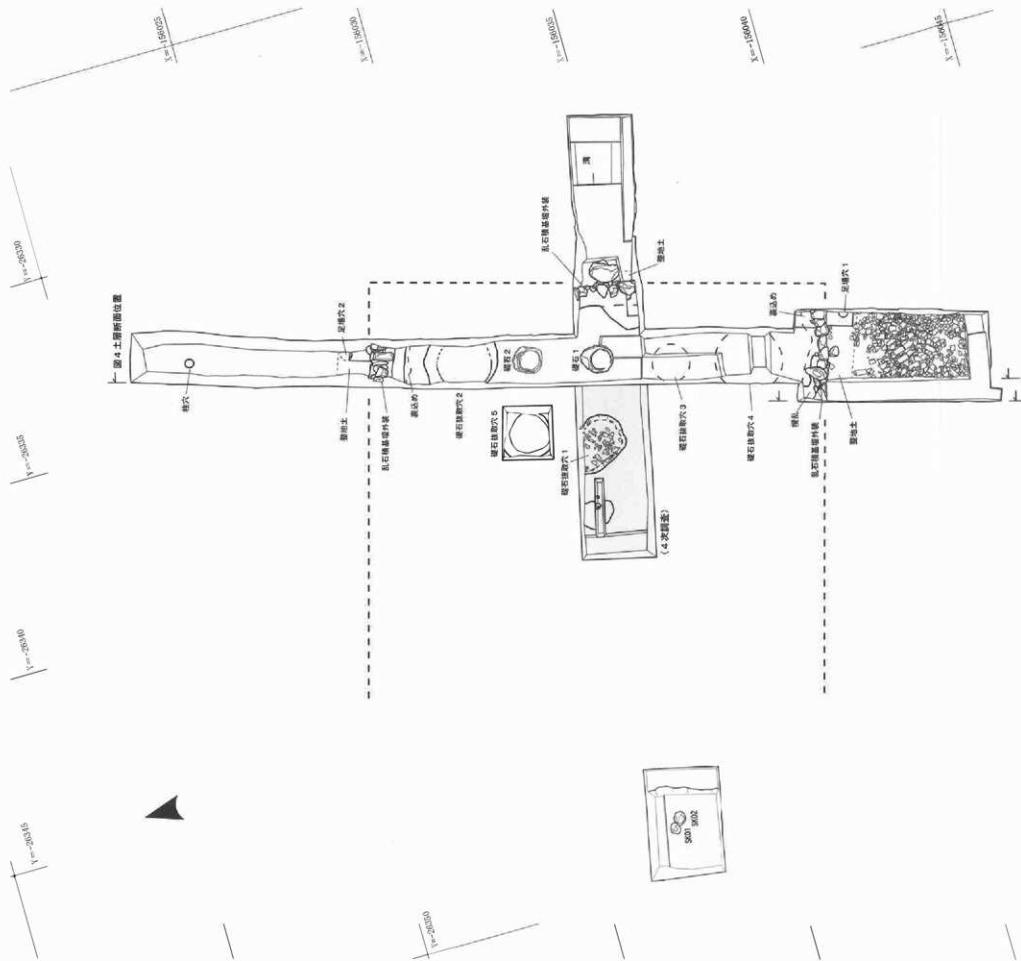


图 5 检出遗物平面图 (1/100)



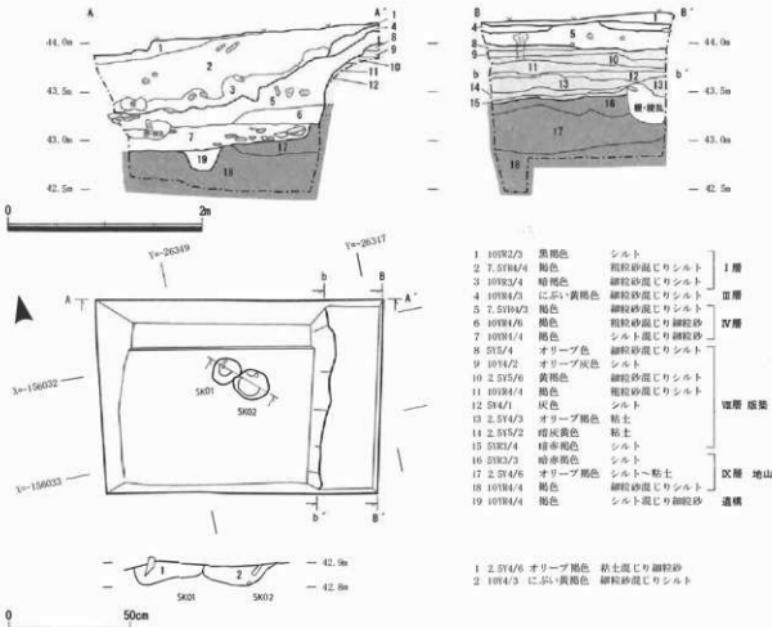


図 6 3 トレンチ 検出遺構平面図、土層断面図 (1/50・1/20)

VII層 基壇南面の外周に堆積する細粒砂混じりシルト層である。その堆積は塔跡の基壇北面の外周に堆積する層（第7次V層）につながり、20cm以上の厚さがあるだろう。建物廃絶以降に堆積した層である。この層からは、素弁・单弁蓮華文軒丸瓦、重弧文軒平瓦、平安前期の均整唐草文軒平瓦、土師器、須恵器、最も新しいもので13世紀後葉～14世紀前葉の瓦器陶が出土している。

VIII層 基壇の築成に関わる層。版築、基壇外装の裏込め、乱石積基壇外装に伴う整地上からなる。版築からの出土遺物はなく、裏込め、整地土には瓦が含まれる。

IX層 地山。基壇の南面では標高43.46m、北面で42.9m、東面で43.1mで検出している。3トレンチでは42.91mで検出しているが、検出した地山も削平されている。基壇の南と北では、地山を検出した標高に約56cmの差があり、地山は南から北へと低くなっている。

2 検出遺構

基壇 基壇の北、南、東面の基壇外装を検出した。基壇の南北長は12.18mを計測している。基壇の西端は、ほぼ垂直に切断されており、西面の基壇外装は全く残っておらず、東西長は残存するだけで13.45mを確認している。礎石1から東面基壇外装までは、1.95～2.08mの距離がある。

基壇面は、礎石1、2の周囲が最も残りがよく、標高44.4mで検出した。基壇面は西に行くほど削平を受けており、3トレンチでの検出面は標高43.98mで、約40cmの削平を受けている。基壇の高さは、基壇外周の地山面から計測すると、南面で1.07m、東面で1.3m、北面で1.45mと、周囲の地形が傾いていることから各面で差が生じている。

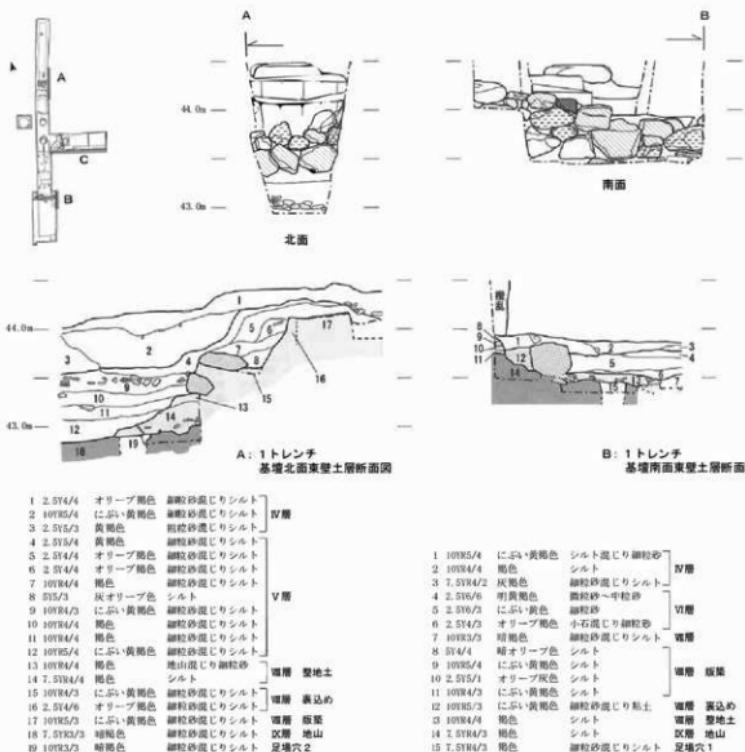
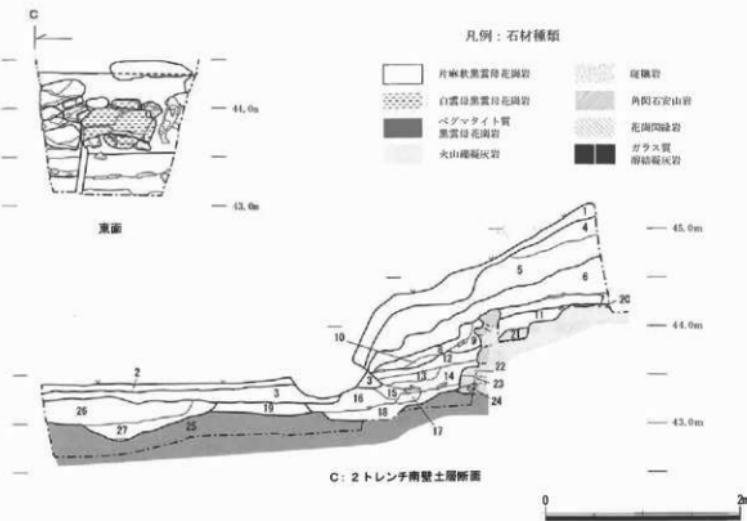


図7 基壇外装立面図、土層断面図（1/50）

第4次調査で1層の厚さが4~10cmで12層、厚さ約60cmの版築を確認しており、版築によって基壇を構築したことがわかっている。基壇面が削平されていることもあり、本来は約80cmの版築があったと考えられる。3トレンチでは、厚さ約52cm、8層の版築が残存していることを確認した。第4次調査、3トレンチで確認した版築の下層に地山があること、基壇外装外側で行った断ち割りでも整地土の下に地山が確認できることから、掘込地業は行われていない。版築下の地山の標高が、基壇外周の地山の標高より高いことから、地山を削り出して整地をした後に版築を行ったと考えられる。

基壇外装 亂石積基壇外装とそれに伴う整地上を基壇の北、南、東面の三面で確認した。

北面の基壇外装は、高さ約76cm、2~3段の石積が残存している。石積の内側は深く攪乱を受け、V層の整地土が入り込んでいるが、基壇版築の外側に17cmの幅で裏込めが残存している。乱石積基壇外装の外側下端には、瓦を含む整地土がある。整地の状況を確認するために、東壁ぎわで石積の下まで断ち割りを行った。石積の内側へ整地土が延びていることを確認したが、外装内部まで断ち割りを入れることはできないので整地土と基壇、裏込めとの関係を確認することはできなかった。整地土は石積の下で厚さ約52cm、石積から外側へ約80cmの位置まで広がり、斜面を形作るよう整地されている。整地土からは、素井連華文丸瓦、平瓦、丸瓦



1 10TR4/4 黄色	輝粒砂混じりシルト	I 層
2 5T2/2 オリーブ黒色	粘土	
3 5T2/2 オリーブ黒色	粘土混じり輝粒砂	
4 10TR5/6 黄褐色	粘土	
5 10TR4/6 黄色	シルト混じり輝粒砂	II 層
6 2.5T4/6 オリーブ褐色	輝粒砂混じりシルト	Ⅲ層
7 10TR4/6 黄色	シルト混じり輝粒砂	
8 10TR4/4 黄色	輝粒砂混じりシルト	IV 層
9 10TR4/3 にぶい黄褐色	輝粒砂混じりシルト	
10 7.5TR4/4 喙褐色	輝粒砂混じりシルト	
11 10TR5/6 黄褐色	輝粒砂混じりシルト	V 層
12 10TR4/4 黄色	輝粒砂混じりシルト	
13 10TR3/3 喙褐色	輝粒砂混じりシルト	
14 7.5TR4/4 黄灰色	輝粒砂混じりシルト	
15 5T4/2 反オリーブ色	粘土	
16 5T2/2 オリーブ黒色	輝粒砂混じり粘土	
17 10TR4/2 反黄褐色	粘土	
18 7.5TR4/1 黄褐色	粘土混じり輝粒砂	
19 2.5T4/1 黄褐色	輝粒砂混じり粘土	Ⅳ層 地土？
20 5T5/4 オリーブ色	シルト	Ⅳ層 蔓葉
21 10TR5/4 にぶい黄褐色	輝粒砂混じりシルト	Ⅳ層 裏込め
22 7.5TR4/3 黄色	シルト	
23 7.5TR4/4 黄色	輝粒砂混じりシルト	Ⅳ層 整地土
24 10TR4/1 黄褐色	シルト混じり輝粒砂	
25 2.5T5/6 黄褐色	輝粒砂混じり粘土	Ⅴ層 地山
26 7.5T4/1 灰色	粘土	
27 5T4/2 反オリーブ色	粘土混じり輝粒砂	Ⅴ層

が出土している。

南面では、東西方向に2.4m、高さ約81cm、1~4段の石積を検出した。西側の残りがよい。石積の内側は擾乱を受けているが、東壁ぎわで基壇版築から約27cm幅の裏込めを確認している。石積の下では、瓦を含む厚さ10cmの整地土が石積の外側96cmの位置まで堆積している。整地上には、秦弁蓮華文丸瓦、丸瓦が含まれる。

東面の基壇外装は、最も残りの良いところで高さ76.5cm、4段の石積が残存する。第4次調査で石列の外側で一部を確認していた石は、基壇外周のV層(中世)に設置されている。石の下には根石が入れられ、上面が水平になるよう調整されている。もとは西安寺に使用された石材とみられる。南壁ぎわで外装の内外で断ち割りを入れた。内側の裏込めは幅31.8cm。外側の整地土は、石積下で厚さ約29cm、石積から外側へ26.7cmにまで堆積している。整地上には、瓦が含まれる。

基壇の三面で検出した整地土は乱石積の構築のために施されている。各面で整地の度合いが違うのは、基壇の周囲の南が高く北が低い地形によるもので、地山の最も高い南面での石積の基底のレベルは標高43.5m、東面、北面での乱石積の基底レベルは南面の土10cm程度であり、乱石積の基底の高さを揃えるために施したものと考えられる。

乱石積には、小さいもので10～20cm、大きいもので40～50cm程度の石が用いられている。西安寺跡の東方山地の石である片麻状黒雲母花崗岩、白雲母黒雲母花崗岩、花崗閃綠岩の使用が大半を占めている。南面の乱石積では、火山礫凝灰岩(鹿谷寺北方の石)2点が石の隙間を埋めるように置かれ、角閃石安山岩(明神山の石)2点は乱石積に伴う整地土に埋もれる位置にある。また、乱石積の積み方には進いが認められる。南面、東面では石の長辺を正面にして積まれており、北面では石の小口を正面に据えている。

礎石1 第4次調査で検出した礎石を再検出した。南北長85.7cm、東西長73.28cm、直径約53cmの柱座を持ち、礎石の縁辺は火を受けて赤く変色している。柱座上には直径約45cmの変色しない部分があり、柱の痕跡とみられる。礎石の上面の標高は44.49m(第8次計測値)で、石種は片麻状黒雲母花崗岩である。

礎石2 純石1と同じく再検出の礎石である。南北長79.5cm、東西長70.9cm。明確な柱座の造り出しは認められないが、約45cm四方の不整形な範囲で平坦な面が加工されている。礎石の表面全体が被熱し赤い。礎石の上面の標高は、44.48m(第8次計測値)。純石1と純石2の芯々での距離は、189cmを測る。片麻状黒雲母花崗岩を使用している。

礎石抜取穴2 純石2の北側で、南北長1.96m、東西長は、トレンチ幅1.0mを超える土坑を検出した。深さは43.2cmで基壇上に堆積するIV・V層が埋土となっている。純石1、2の延長上にあり、礎石抜取穴である。

礎石抜取穴3 第4次調査では、純石1の南側で遺構を検出できなかったが、西壁上層断面で礎石の抜取穴を確認した。I層表土下のIII層上面から掘り込まれており、近代の礎石の抜き取りとみられる。抜取穴の上端は、南北長は5mを超え、深さは97.5cm、基壇検出面下12.8cmに達している。

礎石抜取穴4 純石抜取穴3の南側の西壁上層断面で確認した。南北長1.52m、深さ50.7cmを測る。IV層整地土上面から掘削されており、礎石はIII層盛土以前に抜き取られている。

礎石抜取穴5 4トレンチで検出した抜取穴である。トレンチの全域が擾乱を受けており、I層の下は、深さ70～80cmまでプラスチック等が混入する擾乱層である。標高44.3mで基壇を検出した。抜取穴内の堆積には、版築土が混ざるIV層が堆積し、瓦、土器類、須恵器、瓦器、瓦質土器が出土した。抜き取りが行われた時期は、不明である。

足場穴1 南面基壇外装の断ち割り内で、乱石積から42cm外側で検出した柱穴である。直径約23cm。整地土を除去した後の地山上で検出した遺構である。足場穴と考えられる。

足場穴2 北面基壇外装の断ち割り内で、乱石積から45cm外側で検出した直径31cmの柱穴である。整地土以前の遺構で足場穴と考えられる。

溝 2トレンチの東端で検出した南北方向の溝状遺構。検出面はI層水田耕土の下面で、西脇のみの検出である。深さ45.7cm。上層に灰色粘土、下層に灰オリーブ色粘土混じり細粒砂が堆積し、遺構の底に瓦が集中する。トレンチの東端で底が上がりいく様子が認められる。

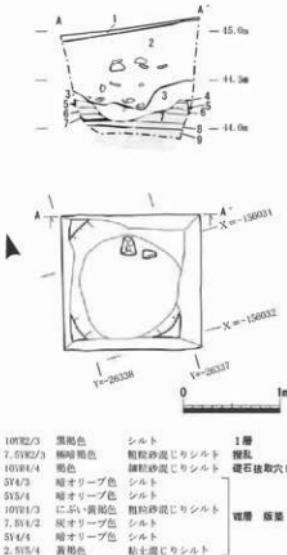


図8 4トレンチ
検出遺構平面図、上層断面図(1/50)

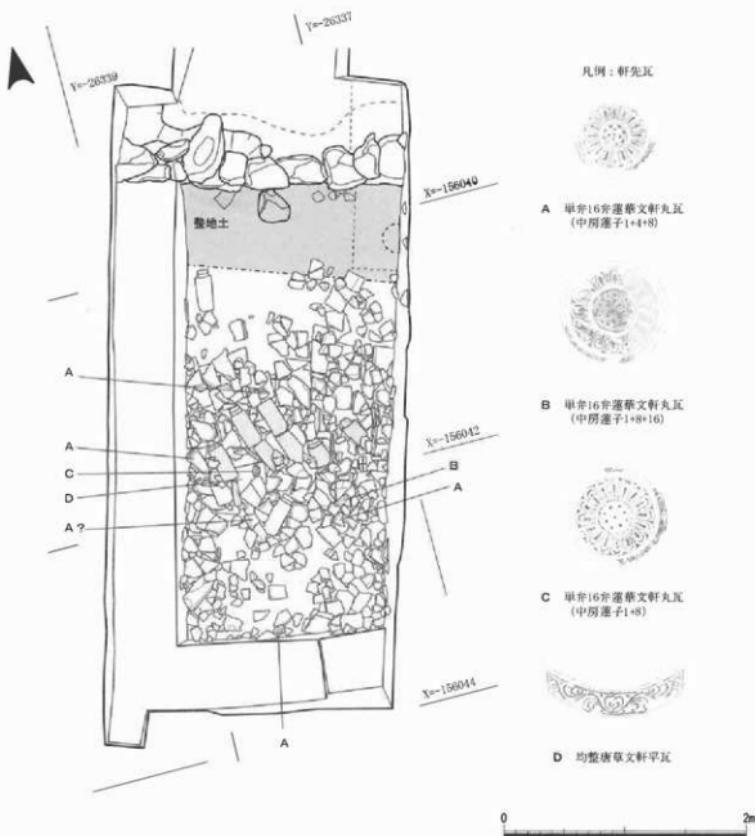


図9 1トレンチ 基壇南面遺物出土状況 (1/40)

SK01・SK02 3トレンチ地山上で検出した土坑。SK01は直径24.0cm、深さ9.8m、SK02は直径29.4cm、深さ8.1cm、2基とも円形で隣接している。

基壇外周 1トレンチの基壇南面、乱石積基壇外装の約75cm外側から堆積するVII層からは、大量の瓦が出土している。その出土状況をみると、丸瓦が平行に並ぶ様子がみてとれ、2か所で玉縁部を組み合わせた丸瓦の出土が確認できた。玉縁部が基壇の方向を向いており、丸瓦の間には割れた平瓦も確認できることから、建物に所用された瓦が、屋根からまとめて滑落し、そのまま埋まつたものと考えられる。これらの瓦の堆積は、塔との間に広がるものと予想されるため、現地で保存している。図9に示す軒先瓦の出土を確認しており、掘削中に取り上げた軒先瓦を含む出土数は、素弁8弁蓮華文軒丸瓦1点、単弁16弁蓮華文軒丸瓦(図9-A)が6点、単弁16弁蓮華文軒丸瓦(図9-B)が1点、単弁蓮華文軒丸瓦(図9-C)が3点、三重弧文軒平瓦が2点、均整唐草文軒平瓦(図9-D)が1点である。

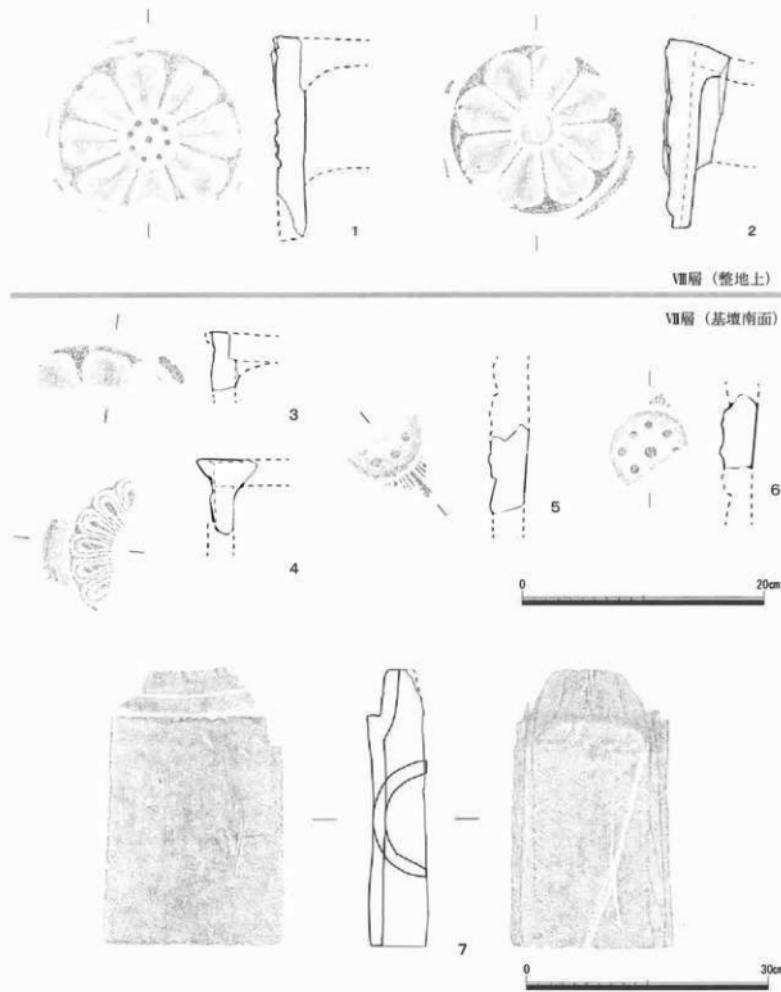


図 10 出土遺物実測図 1 (1/4・1/6)

3 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、コンテナ 374 箱である。遺物の大半の洗浄作業が終了していないため、現場作業中に抽出した遺物の中から報告する。

VII層 基壇外装の乱石積に伴う整地土から 2 点の軒丸瓦が出土している。1 は基壇の南面からの出土で、素弁 8 弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当径は 16.9cm (復元)、中房の直径は 3.4cm あり、蓮子は 1+8、外側の蓮

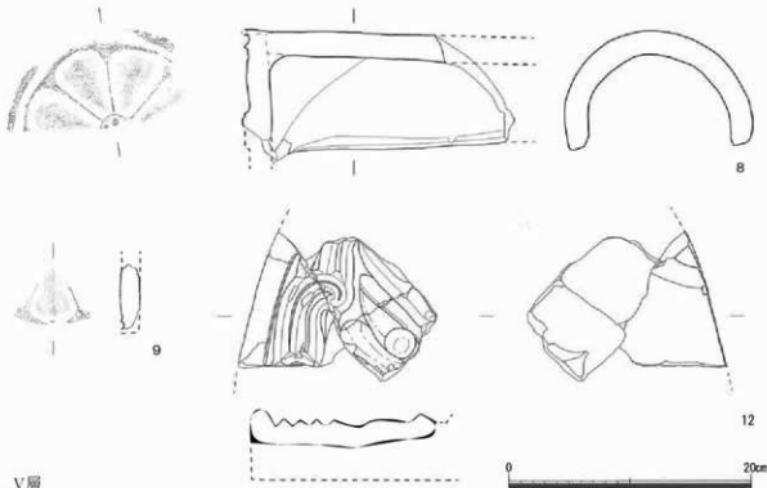


図11 出土遺物実測図2 (1/4)

子が中房の外縁角にかかる位置にある。中房の周囲には、幅約0.6cmの凹溝が巡る。弁端中央には、鑓、弁端には小珠を置く。片岡王寺跡で同文様の出土が知られる。色調はN7/0灰白色で焼成は軟質である。2は、基壇北面の乱石積に伴う整地上から出土した素弁8弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当径15.0cm(復元)、中房径は2.9cm、1+6の蓮子が確認でき、中房の周囲には、凹溝が巡る。蓮弁はやや角張り弁端に小珠がある。色調は2.5Y8/1灰白色で焼成は軟質、胎土は砂粒の混入が少なく摩滅が激しい。この瓦は若草伽藍の創建補足瓦の6Bとの同范を確認した。中房周りの凹溝内(写真図版8-2イ)、弁区外側の溝内(写真図版8-2ロ)にみられる范傷が一致している。弁区外側の溝内の范傷が若草伽藍例よりも進行しているので、若草伽藍→西安寺の順で瓦范は使用されている。同じ范を使用した瓦であるが、若草伽藍の瓦が方枘式の接合方法を用いているのに対し、2の丸瓦先端は未加工で、瓦当と丸瓦を突き合わせている。また、胎土、焼成にも違いが認められる。

VII層 運構精査の際に取り上げた遺物を報告する。3は素弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁の形状は斑鳩7Abに近い。瓦当裏面には、丸瓦の剥離面が認められ、接合に際して特に加工した様子は認められない。4は単弁16弁蓮華文軒丸瓦である。外縁が斜線であること、蓮弁の長さから塔の創建瓦とした図9のAと同文様である。中房内の蓮子1+4+8の軒丸瓦である。5・6は中房内の蓮子が1+8の単弁16弁蓮華文軒丸瓦である。7は玉縁部に水切り溝のある丸瓦である。本調査ではこの丸瓦の出土が目立った。全長34.4cm、胴部は狭端と広端の差が1cm足らずで、外観は長方形である。凸面はなで調整、凹面は糸切り痕、布目痕がある。布目は丸瓦部から玉縁部まで連続しており、玉縁部凹面で布目が絞られている様子が確認できる。

V層 8は素弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当径は約17.5cmに復元できる。中房径3.0cm(復元)、蓮子1+(5)、中房外縁に圓線(写真図版9-8イ)を有する。瓦当面外縁には3個の小珠(写真図版9-8ロ~ニ)と幅0.8cmの凸帯状の范傷(写真図版9-8ロ)が認められる。丸瓦凸面は斜め方向のケズリで器面調整し、凹面には密な布目痕がある。色調は5PB4/1暗青灰色で焼成は堅緻である。この瓦は、若草伽藍堂北方建物所用の斑鳩7Abとの同范を確認した。丸瓦の接合方法に違いがあり、若草伽藍例は丸瓦を斜めに切り楔形とし、先端に刻み目を入れるが、西安寺例は、丸瓦先端の加工は行わず、瓦当外縁と丸瓦凸面上端を突き合わせ、凸面側に

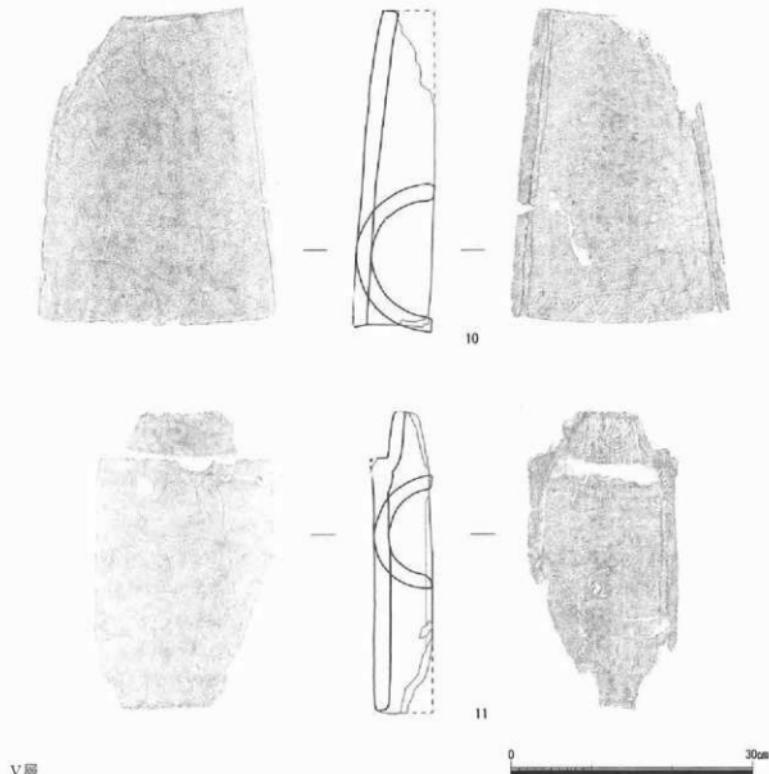


図12 出土遺物実測図3 (1/6)

厚さ3mm程度の粘土をかぶせて接合している。瓦当裏面の接合の粘土も薄く、横方向のなで調整を行っている。9は素弁8弁蓮華文軒丸瓦。蓮弁1枚分だけが残るが外区に1条の范傷(写真図版9-9イ)があり、その位置が斑鳩6Bのものと一致し、同范である。10は行基丸瓦。2トレンチからの出土である。全長39.2cm、狭端幅13.9cm、狭端高6.3cm、広端幅19.6cm、広端高10.2cmである。凸面は綿タタキのちなで、凹面には密な布目痕がある。色調は、5Pb5/1青灰色で、焼成は堅緻である。11は玉縁丸瓦。1トレンチ基壇北面からの出土である。全長37.1cm、玉縁部幅7.7cm、胴部幅14.5cm、高さ7.2cm。凸面は摩滅しているが、綿タタキが認められる。凹面には糸切り痕があり、粗い布目痕が玉縁部まで連続する。色調はN5/0灰色、焼成は良好である。12は奈良時代の鬼面文鬼瓦で、天理大学附属天理参考館に所蔵される鬼瓦の一部と報告した第4次調査の出土品と接合する。

若草伽藍所用瓦との同范瓦 今回の調査で西安寺跡出土瓦と若草伽藍所用の瓦に同范品があることを確認した。本調査の出土遺物の他に、第3次調査出土の素弁8弁蓮華文軒丸瓦(第3次報告書写真図版9-1)、第7次調査出土の素弁蓮華文軒丸瓦(第7次報告書写真図版11-1)が斑鳩7A bと同范である。范傷で同范を確認できたものは計5点あり、その他にも同種の素弁蓮華文軒丸瓦5点の出土を確認している。

第3章 まとめ

基壇建物の評価 第4次、第8次調査を通して、礎石2個、礎石抜取穴5基、東、南、北面の乱石積基壇外装を検出した。西面については、基壇の西端近くまで遺構が残っていることが確認できた。花崗岩を主体とした乱石積基壇外装をもつ基壇の南北長が12.18m、残存する東西長が13.45mであったことから、基壇は東西を長辺とすることが予測される。塔の中軸を利用して、中軸から外装東端までの距離を反転させると、基壇の仮の東西長は14m余となる。検出した礎石、礎石抜取穴から南北方向に5個の礎石が配されているので、梁行4間の東西方向に棟が通る建物であろう。検出した礎石列は建物東面の側柱であり、2m前後の基壇の出、礎石1と2の柱間1.89mをもとに計算すると、仮の基壇東西長の中には、礎石6個が納まることになる。したがって、基壇建物は梁行4間、桁行5間の建物と復元できる。古代寺院の金堂の平面プランとして普遍的であり、他の金堂の桁行と梁行の比とも差異がなく、塔の北側に位置することから、この建物は西安寺の金堂と考えて間違いないだろう。

金堂の規模 金堂の東西長の推定に使用した塔の中軸は、これまでの調査からでは角度が若干定まらなかつたので、令和元年(2019)度に行った第9次調査の成果から得られた中軸(N 15.8 E)を使用して復元を試みる。また、造営尺は、塔の復元に使用した1尺30cmが礎石1と2の柱間1.89mに当たはめると6.3尺となるため、金堂にも使用する。基壇は東西46.9尺(14.07m)、南北40.6尺(12.18m)。基壇の出は検出した乱石積が緩んでいることを考え、礎石1から東面基壇外装の実測値を参考に6.5尺(1.95m)が適当であり、基壇の寸法から基壇の出を差し引くと、建物は東西34尺(10.2m)、南北27.6尺(8.28m)となる。梁行は、礎石の残る身舎の柱間が6.3尺(1.89m)であるので、庇の柱間は7.5尺(2.25m)となる。この庇の寸法を桁行に当たはめると、中央間と脇間が6.3尺(1.89m)の等間に配分できる。確実な遺構は礎石2個と基壇外装だけで数値の前後はあるかもしれないが、これまでの調査成果から考えられる復元値である。

創建と廃絶 基壇南面で出土した瓦から金堂の創建と廃絶の時期を考えると、軒丸瓦では塔の創建瓦とした単弁16弁蓮華文軒丸瓦の出土数が多い。堂塔の創建瓦は同じ7世紀後半の単弁蓮華文軒丸瓦を使用し、一般的に、塔の建立よりも金堂の建立が先行すると考えられるので、塔と同時期か少し早い7世紀後半が金堂の創建時期と考えられる。また、検出した瓦の中には平安時代前期とみられる均整唐草文の軒平瓦がある。西安

表1 古代の金堂(遺構)の比較

寺院名	年代	建物								基壇	備考		
		桁行 間数	梁行 間数	桁行(m)		梁行(m)		桁方向 (m)	梁方向 (m)				
				中	脇	端	中	端					
西安寺跡	7世紀後半	5	4	10.2	8.28	1.89	1.89	2.25	1.89	2.25	14.07 12.18		
				1 : 1	0.81	1 : 1	1 : 1.19	1 : 1.19	1 : 1.19	1 : 0.87	乱石積		
四天王寺	7世紀後半	5	4	—	—	—	—	—	—	19.32 15.87	切石積? 硫灰岩製地 覆石検出		
中宮寺跡	7世紀前半	5	4	13.0	10.4	2.6	2.6	2.6	2.6	17.3 14.1	切石積		
				1 : 1	0.8	1 : 1	1 : 1	1 : 1	1 : 1	1 : 0.82			
山田寺跡	643年	3	2	14.5	11.5	4.84	4.84	4.84	5.75	—	21.6 18.5		
				1 : 1	0.79	1 : 1	1 : 1	1 : 1	—	1 : 0.86	切石積 特異な柱位置		
川原寺跡 中金堂	7世紀後半	5	4	16.75	11.96	3.59	3.59	2.99	2.99	2.99	23.6 19.4		
				1 : 1	0.71	1 : 1	1 : 0.83	1 : 1	1 : 1	1 : 0.82	花崗岩地覆石を検出		
輪隈寺跡	7世紀後半	5	4	13.92	11.38	2.72	2.72	2.88	2.81	2.88	17.95 15.5		
				1 : 1	0.82	1 : 1	1 : 1.06	1 : 1	1 : 1.02	1 : 0.86	二重基壇 上成不明 下成玉石敷き		
法隆寺 西院伽藍	7世紀後半	5	4	14.02	10.79	3.236	3.236	2.157	3.236	2.157	23.63 20.9		
				1 : 1	0.77	1 : 1	1 : 0.67	1 : 1	1 : 0.67	1 : 0.88	切石積 二重基壇 (表階數値は省略)		

参考文献 齊良文化財研究所・國立扶桑文化財研究所 2015

『東アジア古代寺院址比較研究(II) - 金堂址編 - (日本語版)』 国立扶桑文化財研究所学術研究叢書第54輯

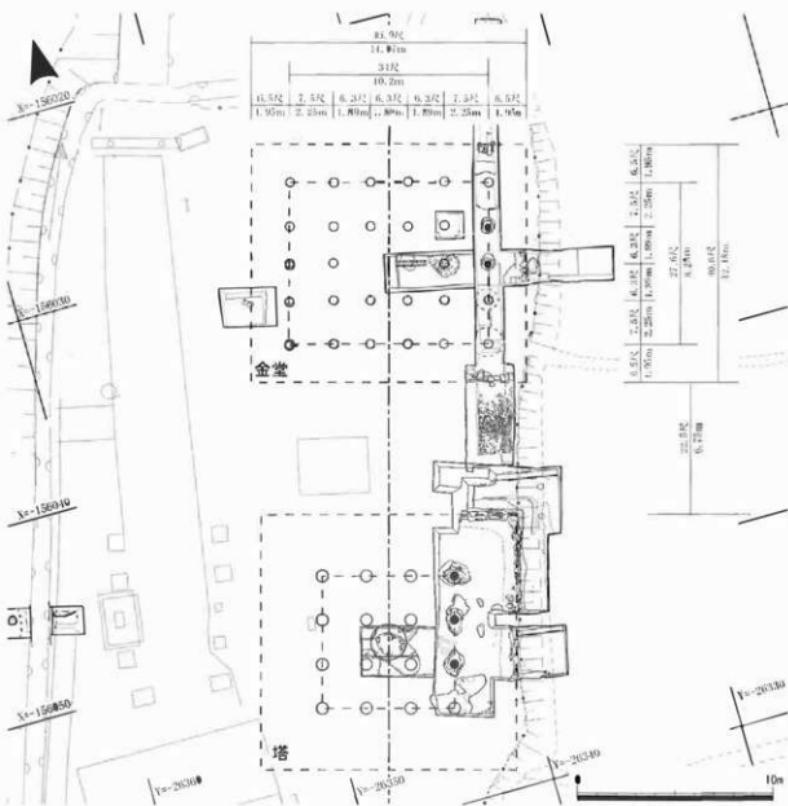


図13 金堂規模の復元(1/250)

寺跡の発掘調査では、中世以降の堆積土から平安時代後期～室町時代の瓦が出土するが、金堂の基壇外周の瓦の堆積の中にそれらの瓦は含まれない。乱石積に作る整地土への瓦の混入や、基壇外周での飛鳥時代から平安時代前期の瓦の出土の状況から、基壇外装の積みなおしや、屋根の修復、または瓦の差し替えが行われたことがわかり、平安時代前期の修復を最後に倒壊し、廃絶したと考えられる。また、調査で検出している堂塔の創建は7世紀後半から8世紀初頭としているが、今回、若草伽藍所用の瓦との同範が確認できたことで、飛鳥時代前期にさかのぼる前身建物の存在も考えられ、斑鳩地域との関連を考えられるようになった。

今後の調査 塔の北側の基礎建物は金堂であることが確定し、塔と金堂が南北に並ぶことから、西安寺は南向きの四天王寺式伽藍配置の寺院と考えられる。四天王寺式の伽藍配置であれば、堂塔の周りに回廊が巡り、金堂の北側には講堂がある。塔の南には中門が建てられたと考えられるが、西安寺跡の南側は、丘陵が迫っており、寺の入り口として、十分な広さを確保できない。それに対し、西側は緩やかに傾斜した土地が広がり、西方には街道も通ることから、西側に中門を置いた可能性も考えられる。このように、堂塔の位置が確定したことから、西安寺の伽藍をかなり想定できるようになった。令和元年(2019)度の第9次調査では、堂塔を囲む回廊、講堂の有無を確認できるよう神社の周辺にも調査の範囲を広げていく予定である。



調査前（南東から）



調査前（北から）



3 トレンチ 調査前
(西から)



1 トレンチ 遺構検出状況
(北から)



1 トレンチ 基壇外装北面
検出状況 (南東から)



1 トレンチ 基壇外装南面
検出状況（西から）



2 トレンチ 基壇外装東面
検出状況（東から）



3 トレンチ
基壇検出状況（西から）



1 トレンチ

基壇外装北面断ち割り（北から）



2 トレンチ

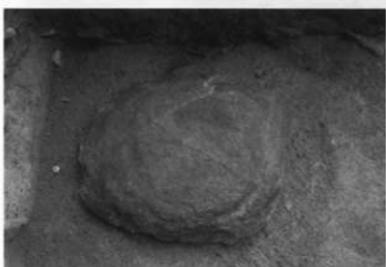
基壇外装東面断ち割り（東から）



1 トレンチ 基壇外装南面断ち割り（南西から）



1 トレンチ 磯石 1 (西から)



1 トレンチ 磯石 2 (西から)



1 トレンチ 磯石抜取穴 2 (南から)



4 トレンチ 磯石抜取穴 5 (北から)



1 トレンチ 西壁
礎石抜取穴 4 (東から)



2 トレンチ
遺構検出状況(南西から)



2 トレンチ 南壁(北から)



1 レンチ
基壇南面 東壁
(南西から)



1 レンチ 基壇南面
均整唐草文軒平瓦出土状況
(北西から)





1



2



2 1



2 2



3



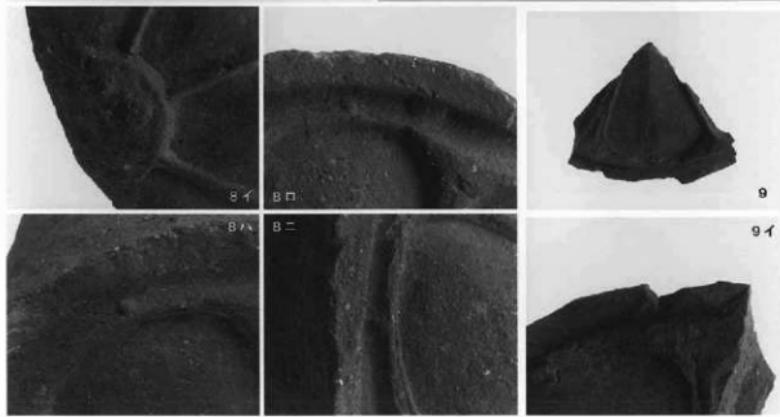
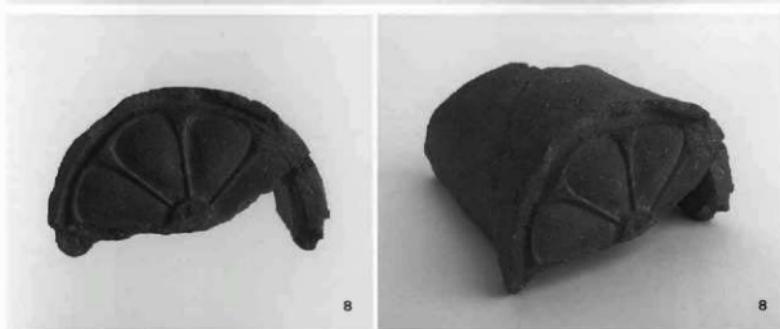
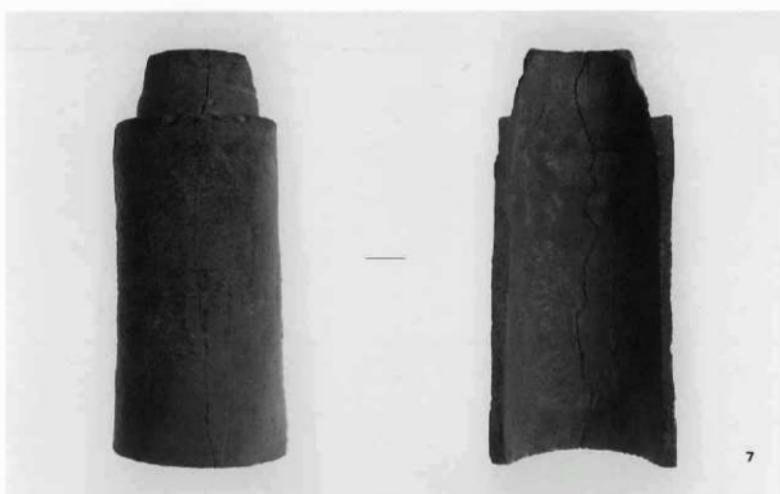
5



6



4





10



11



12



12

報告書抄録

ふりがな	さいあんじあとだい8じはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	西安寺跡第8次発掘調査報告書							
シリーズ名	王寺町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第15集							
編著者名	櫻井恵							
編集機関	王寺町							
所在地	〒 636-0002 奈良県北葛城郡王寺町王寺2丁目1番23号							
発行年月日	令和2(西暦 2020)年3月27日							
収集遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村 番号	遺跡 番号					
西安寺跡 (第8次)	奈良縣北葛城郡 王寺町 壬2丁目	29425	1061	34° 35' 36"	135° 42' 45"	2018.11.1 ~ 12.28	58 m ²	範囲確認
収集遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西安寺跡 (第8次)	寺院	古代～中世	金堂跡、乱石積基壇、礎石、 礎石抜取穴	軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、 埴、壁上、鉄釘、土師器、須恵器、 瓦器、瓦質土器		金堂の遺構を確認し、西安寺が南向きの四天王寺式伽藍配置である可能性が高い		

西安寺跡第8次発掘調査報告書

王寺町文化財調査報告書 第15集

2020年3月27日

編集 王寺町
発行 奈良県北葛城郡王寺町王寺2丁目1番23号

印刷 株式会社 明新社
奈良市南京終町3丁目464番地